

2018年（平成30年） 10月12日（金曜日） 毎週（金）14:00発行

発行所 (一財)日本エネルギー経済研究所
石油情報センター電話 (03) 3534-7411 (代)
FAX (03) 3534-7422〒104-8581 東京都中央区勝どき1-13-1イヌビル・カドキ11階
ホームページ <https://oil-info.ieee.or.jp>

■ 概況

9/27~10/3のNYMEX・WTIは、72.12~76.41ドルの範囲で強含みで推移した。

10月4日は、サウジとロシアが9月の合同委員会時に密かに増産で合意し米国にも通報済みであった旨のロイター報道、前日のEIAの米国原油在庫の前週比800万バレル積み増し報告などを受けて大幅反落した。11月限終値は前日比2.08ドル安の74.33ドルだった。

週末5日は、イラン経済制裁再開が迫る中、好調な雇用統計など底堅い米国経済に支えられる一方、高値圏での利益確定や持ち高調整の売りも出やすく、ほぼ横ばいとなった。ベーカーヒューズ社発表の米国内石油掘削リグ稼働数は861基（前週比2基減）と3週連続で減少したが、大きな影響はなかった。11月限終値は前日比0.01ドル高の74.34ドル。

週明け8日は、インドのブラダン石油相が、米国のイラン制裁の適用除外には言及しなかったものの、同国2社が11月分のイラン産原油購入を発注した旨明らかにしたことで、過度の供給ひっ迫感が和らいたが、値ごろ感の買いや中国が金融緩和策を発表したことで買いが入り、小反落にとどまった。11月限終値は前週末比0.05ドル安の74.29ドル。

9日は、10月第1週のイラン産原油輸出の減少報道やハリケーン「マイケル」のフロリダ州接近による供給懸念から、反発した。11月限終値は前日比0.67ドル高の74.96ドル。

10日は、翌日のEIAの米国在庫週報の積み増し予想、米国長期金利上昇による米国株式市場暴落の影響で大幅反落した。前日の国際通貨基金(IMF)による2018~9年の世界

の成長見通しの下方修正も売り材料となった。11月限終値は前日比1.79ドル安の73.17ドル。

アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場（11月渡し）は、前週80.10~83.20ドルの範囲で推移した。10月4日84.10ドル、5日83.40ドル、9日82.90ドル、10日83.30ドルで推移した。

為替は、前週112.89~113.99円の範囲で推移した。10月4日114.42円、5日114.13円、9日112.97円、10日113.06円で推移した。

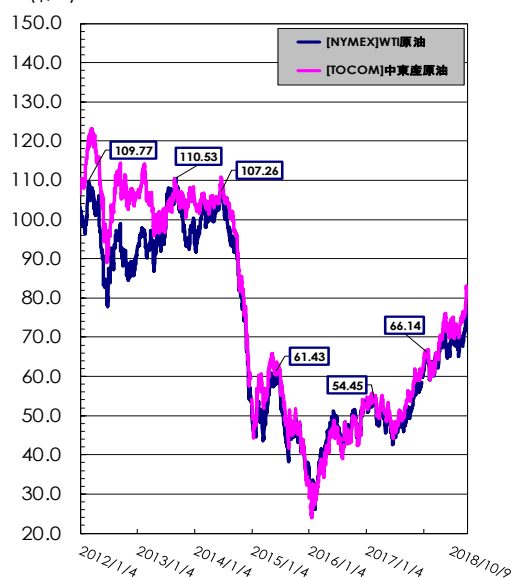
財務省が5日発表した貿易統計（速報・旬間）によると、9月中旬の原油輸入平均CIF価格は、53,210円/klで、前旬比232円高、ドル建てでは76.08ドルで前旬比0.03ドル高。為替レートは1ドル/111.18円だった。

主要元売会社の10月第2週に適用する卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社2.5円の値上げとなった。原油価格は大きく値上がりし、為替レートも円安で、原油調達コストは大きく値上がりとなった。

そのような中で、10月9日時点の小売価格は、ガソリンが前週比2.3円の値上がり、軽油が同2.1円の値上がり、灯油は同37円の値上がり（18%ベース）だった。ガソリン、軽油、灯油ともに、6週連続の値上がりだった。この週（10月第1週）の原油コストは値上がりし、元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに全社1.0~1.5円の値上げだった。

原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	9/30 ~ 10/6	2,819 ▼ -476	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	72.0 ▼ -12.1	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	10/6	11,266 ▼ -390	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	10/9	81.95 ▲ 1.79	▲ 28.4
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	10/8	74.29 ▼ -1.01	▲ 24.7
	原油CIF単価 (\$/bbl)	9月中旬	76.08 ▲ 0.03	▲ 24.57
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	53,210 ▲ 232	▲ 17,737
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	111.18 ▼ -0.44	▼ -1.70
	外国為替TTSレート (¥/\$)	10/9	113.97 ▲ 0.95	▼ -0.21

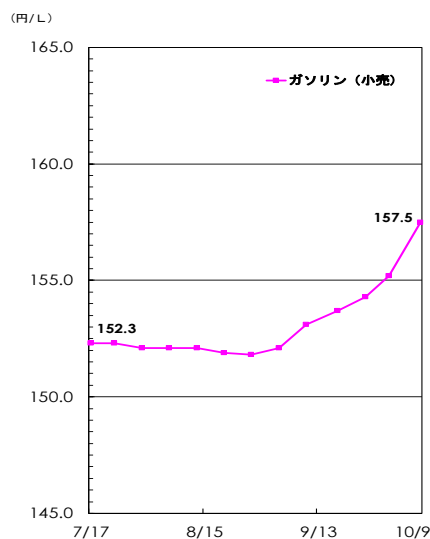
(\$/b)



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	9/30 ~ 10/6	774 ▼ -215	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	917 ▲ 35	▼ -	
	輸出	"	31 ▼ -53	▼ -	
	在庫	10/6	1,451 ▼ -173	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	10/2 ~ 10/8	74.6 ▲ 3.5	▲ 20.3	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	10/2 ~ 10/8	75.3 ▲ 3.6	▲ 22.0
		(TOCOM/中部)	10/5	76.2 ▲ 5.2	▲ 23.5
	小売 [週動向] (資工庁公表)	10/9	157.5 ▲ 2.3	▲ 22.6	

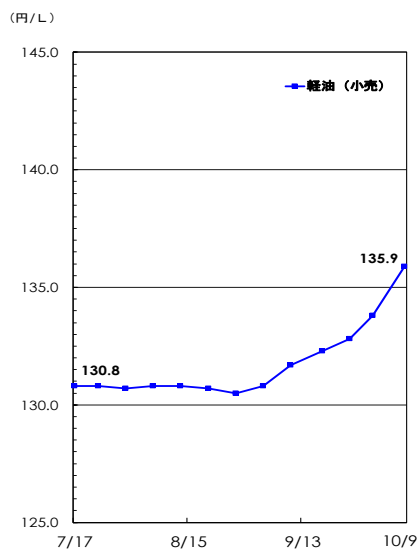
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

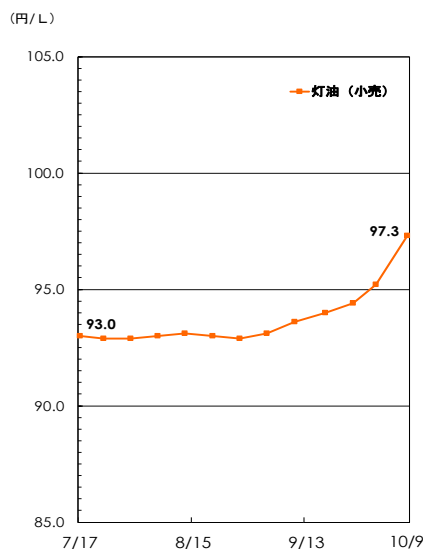
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	9/30 ~ 10/6	649 ▼ -108	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	683 ▲ 104	▲ -	
	輸出	"	70 ▼ -54	▲ -	
	在庫	10/6	1,503 ▼ -104	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	10/2 ~ 10/8	74.9 ▲ 2.6	▲ 21.9	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	10/2 ~ 10/8	74.4 ▲ 2.7	▲ 24.4
		(TOCOM/中部)	10/5	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	10/9	135.9 ▲ 2.1	▲ 22.7	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	9/30 ~ 10/6	359 ▲ 47	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	281 ▼ -6	▲ -	
	輸出	"	0 ➡ 0	➡ -	
	在庫	10/6	2,599 ▲ 78	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	10/2 ~ 10/8	74.9 ▲ 2.3	▲ 20.2	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	10/2 ~ 10/8	77.4 ▲ 3.1	▲ 23.3
		(TOCOM/中部)	10/5	77.5 ▲ 3.1	▲ 22.9
	小売 [週動向] (資工庁公表)	10/9	97.3 ▲ 2.1	▲ 19.6	



■ 関連情報

1 海外/原油

10月10日のNYMEX市場WTI原油は、米国長期金利の上昇に伴う米国株式の急落を受けて、景気の先行き不安、投資家のリスク回避による売り、前日発表された国際通貨基金(IMF)の2018~19年の成長見通しの下方修正もあり、大幅に値を下げた。また、翌日に控えた1日遅れの米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報で、国内原油在庫が積み増しが予想されていることも、価格押し下げ要因となった。11月限終値は前日比1.79ドル安の73.17ドル、12月限の終値は前日比1.78ドル安の73.03ドルだった。

EIAによると、10月8日時点のガソリンの小売価格は、前週比3.7セント値上がりの1ガロン2.903ドル(88.2円/ℓ)、ディーゼルは前週比7.2セント値上がりの3.385ドル(102.8円/ℓ)となった。ガソリンは5週連続の値上がり、ディーゼルは7週連続の値上がり。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、平成30年9月30日~10月6日に休止したトッパー能力は57.8万バレル/日で、前週に対して19.9万バレル/日増加した(全処理能力は351.9万バレル/日)。

原油処理量は281.9万klと、前週に比べ47.6万kl減少。前年に対しては46.3万klの減少。トッパー稼働率は72.0%と前週に対して12.1ポイントの減少、前年に対しては11.8ポイントの減少となった。

生産は前週に比べて灯油が増産となり、その他の油種で減産となった。ガソリン/21.7%減、ジェット/57.0%減、灯油/15.2%増、軽油/14.2%減、A重油/7.9%減、C重油/18.5%減。今週のC重油の輸入は7.6万kl(前週比6.6万kl増)。軽油の輸出は7.0万kl(前週比5.4万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は、前週比ではガソリン、軽油、C重油が増加となり、その他の油種で減少となった。前年比では灯油、軽油が増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は91.7万kl(対前週4.0%増)と前週比で2週振り増加となり、5週連続で100万klを下回った。ジェット2.7万kl(対前週81.7%

減)、灯油28.1万kl(対前週2.0%減)、軽油68.3万kl(対前週18.0%増)、A重油18.1万kl(対前週12.4%減)、C重油17.8万kl(対前週20.6%増)。

(単位:千KL)

	今週 (9/30~10/6)	前週 (9/23~9/29)	前週比	
ガソリン	917	882	▲ 35	(4%)
ジェット燃料	27	150	▼ -123	(-82%)
灯油	281	287	▼ -6	(-2%)
軽油	683	579	▲ 104	(18%)
A重油	181	207	▼ -26	(-13%)
C重油	178	148	▲ 30	(20%)
合計	2,267	2,253	▲ 14	(1%)

※今週出荷量=(前週末在庫+今週生産+今週輸入)-(今週輸出+今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

10月6日時点の在庫は、ジェット、灯油が積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。前年に対してはガソリン、ジェット、A重油が取り崩しとなり、その他の油種で積み増しとなった。

ガソリンは145.1万kl、前週差17.3万kl減。前年に対しては18.7万kl少ない。

灯油は259.9万kl、前週差7.8万kl増。前年に対しては0.5万kl多い。

軽油は150.3万kl、前週差10.4万kl減。前年に対しては9.4万kl多い。

A重油は65.8万kl、前週差2.5万kl減。前年に対しては5.6万kl少ない。

C重油は207.7万kl、前週差0.1万kl減。前年に対しては6.5万kl多い。

(単位:千KL)

	今週 (10/6)	前週 (9/29)	前週比	
ガソリン	1,451	1,624	▼ -173	(-11%)
ジェット燃料	908	896	▲ 12	(1%)
灯油	2,599	2,521	▲ 78	(3%)
軽油	1,503	1,607	▼ -104	(-6%)
A重油	658	683	▼ -25	(-4%)
C重油	2,077	2,078	▼ -1	(-0%)
合計	9,196	9,409	▼ -213	(-2.3%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

10月2日から10月8日の原油価格は前週対比で大きく値上がりし、為替レートも円安で、原油コストは大きく値上がりしたものと見られる。

陸上スポット価格は、同期間、ガソリン126~129円台で大きく値上がり、軽油73~75円台で大きく値上がり、灯油73~75円台で大きく値上がりして推移した。

海上スポット価格は、同期間でガソリン129~130円台で

値上がり、軽油75~76円台で値上がり後やや軟化、灯油76~77円台で値上がり後やや軟化して推移した。

先物価格は、同期間で、ガソリン128~129円台で大きく値上がり後やや軟化、軽油73~75円台で大きく値上がり、灯油76~78円台で出入り大きくやや軟化して推移した。

元売の卸価格は、ガソリン・軽油は、2.0~2.5円の値上げ、灯油は全社2.5円の値上げとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

製品スポット市況は、先週に続き、全油種・全取引で値上がりした。値上がり幅も全油種・全取引ともに、2円以上の大きな値上がりだった。

10月第3週(10月11日~10月17日)適用の元売卸価格に影響を与える直近の陸上スポット価格(10月2日~10月8日千葉、川崎、中京、阪神の4地区の陸上ラック価格平均値)は、ガソリンは3.5円の値上がり、灯油は2.3円の値上がり、軽油も2.6円の値上がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、ガソリンが2.9円の値上がり、灯油も3.1円の値上がり、軽油も2.7円の値上がりだった。

先物価格は、ガソリンが3.6円の値上がり、灯油も3.1円の値上がり、軽油も2.7円の値上がりだった。

原油価格は大きく値上がりし、為替も円安で、原油コストは大きく値上がりした。

10月第3週の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油は2.0~2.5円の値上げ、灯油は全社2.5円の値上げとなった。なお、元売会社は、2010年から卸価格の改定に際して、原油や製品相場社仕切りなどの動向を総合的に判断する方式としたが、2014年6月から、原油調達コストをより重視する方式に変更した。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー4地区平均]	今週 (10/2~10/8)	前週 (9/25~10/1)	前週比
レギュラー	74.6	71.1	▲ 3.5
灯油	74.9	72.6	▲ 2.3
軽油	74.9	72.3	▲ 2.6

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値][平均]	今週 (10/2~10/8)	前週 (9/25~10/1)	前週比
レギュラー	75.3	71.7	▲ 3.6
灯油	77.4	74.3	▲ 3.1
軽油	74.4	71.7	▲ 2.7

※上記価格は税抜き価格

参考値 (10/2~10/8実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▲ 3.5	▲ 3.6	▲ 3.6
灯油	▲ 2.3	▲ 3.1	▲ 2.7
軽油	▲ 2.6	▲ 2.7	▲ 2.7
A重油	▲ 2.6		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上/バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

10月9日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比2.3円高の157.5円、軽油も同2.1円高の135.9円、灯油は同2.1円高の97.3円(18%ベースでは37円高の1,751円)だった。ガソリンは6週連続の値上がり、軽油も6週連続の値上がり、灯油も6週連続の値上がり、ガソリンは3年11ヶ月ぶりの高値水準、5月28日以来20週連続で150円を上回った。都道府県別に、ガソリンの値上がりは46都道府県、横ばいは高知県で、値下がりはない。全国最安値は、埼玉県(前週比2.0円高)、次が、徳島県(前週比2.9円高)と千葉県(前週比2.3円高)の153.8円、最高値は長崎県の165.5円(同0.6円

高)で、あった。最も値上がりしたのは、4.1円高の香川県(157.8円)、横ばいは高知県(159.0円)だった。

先週の原油コストは大きく値上がりし、元売の卸価格は、ガソリン・軽油は2.0~2.5円の値上げ、灯油は全社2.5円の値上げとなった。今週も、原油価格は大きく値上がりし、為替レートも円安で、原油コストは大きく値上がりした。次週(10月15日)のガソリンの小売価格は、値上がり予想される。

(資工庁公表) (単位: 円/%)

[週動向]	今週 (10/9)	前週 (10/1)	前週比	直近高値
レギュラー	157.5	155.2	▲ 2.3	08/8/4 185.1
灯油	97.3	95.2	▲ 2.1	08/8/11 132.1
軽油	135.9	133.8	▲ 2.1	08/8/4 167.4

小売価格

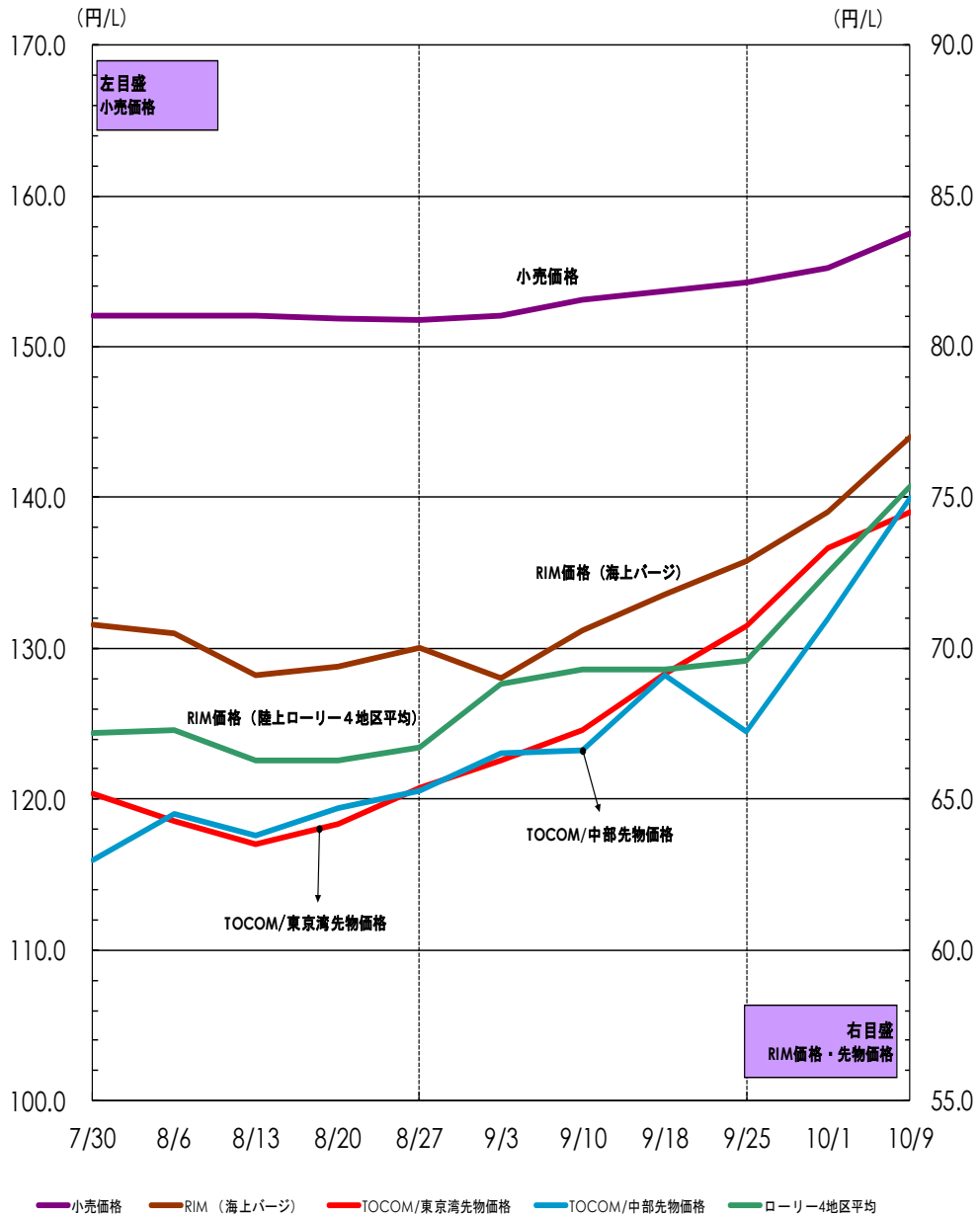
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2018/7/30 ~ 2018/10/9)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2018第27号)の公表は、10/19(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(平成30年3月末現在)は、7月31日(火)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM (Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁-HPIに掲載)。